

学会参加奨励金報告書

学籍番号：R22-064

名前：中田拓甫

学会名：第 41 回日本診療放射線技師学術大会

開催場所：アオッサ 〒910-0858 福井県福井市手寄 1 丁目 4-1

開催期間：2025 年 9 月 12 日(金)–9 月 14 日(日)

発表セッション名：DMAT における診療放射線技師の実態調査

発表形態：一般セッション(e ポスター発表)

発表日時：2025 年 9 月 12 日(金)

1. 発表の概要

本研究は、DMAT における診療放射線技師の実態を明らかにするため、全国の災害拠点病院にアンケート調査を実施した。放射線技師は業務調整員としてクロノロジー作成や EMIS 入力を担い、原子力災害時には線量測定や防護指導、診療補助にも従事していた。技能維持訓練や救命資格（BLS、ACLS 等）が有用とされる一方、訓練回数や災害対策教育の不足、女性技師の少なさ、出動経験の少なさが課題として浮き彫りとなった。特に、訓練と実活動の乖離が問題視され、知識や技術の継承体制の構築が急務である。災害医療における放射線技師の役割は重要であり、今後は教育・訓練体制の強化、多様な人材の育成、現場に即した実践的訓練の充実が必要である。本研究は、放射線技師の災害対応力向上と災害医療体制の発展に寄与する基礎資料となるとともに、今後の施策立案への一助となることが期待される。

2. 質疑応答内容 他

小清水赤十字病院（北海道） 河村康広 氏

北海道の僻地にいるため、派遣が難しい。派遣は少なく、河村氏は超音波検査(US)ができるため、重宝されている。派遣地では医師の依頼により US の読影も行っている。超音波の重要性があり、ポータブルエコーの整備が必要と思われる。女性技師がなかなか派遣できない理由のひとつに、大型の車の運転が難しいことがあげられる。山道や被災地の狭くなった道路の運転は難しいことがある。

兵庫県診療放射線技師会 半薮(はしとみ)英敏 氏

内閣府とのタイアップで講習会を実施、模擬撮影、試験を行って教育をしている。今、若い世代は頭の単純撮影・読影ができず、CT が活用できない場所では単純撮影のみであるため、病院との違いを経験しなければならない。腹部も単純撮影・読影も減ってきており、慣れない方が多い現状である。胸部・骨盤撮影では、緊張性気胸の区別、骨盤骨折出血も医師の依頼で読影を任されることがある。撮影した患者情報については、名前がない人が多いので、必ず番号をつけるなど、分かるように整理しておくこと。また現地での放射線防護に気を付けたい。

京都大学医学部附属病院 小泉幸司 氏

京大病院ではマニュアルがあり、1 年毎に点検、確認すると同時に改善点がないか確認する。しかし、派遣研修に出張させる場合、3 日間とられるので、大変である。災害、DMAT は調達の仕事が多く、放射線での業務が少ない。学生時代に BLS 講習を受ける方が良いと思われる。

3. 関連発表の内容

参加型臨床実習の新たな取り組みに関する講演を聞いた。現在の臨床実習では施設によって実習内容が様々であり、中には見学のようなスタイルで行うところがある。参加型では実際に呼び入れまでを実習し、救急医学等を体系的に行うモデルである。また指導体制も 2:1 モデルという学生 2 名に対して 1 名の診療放射線技師の方が指導を行う施設があり、より技師の方とコミュニケーションが取りやすく、ハラスメント防止にも繋がる政策であった。しかし参加型臨床実習には施設の規制が厳しく、まだまだ協議していく必要がある。

4. 学会参加の感想

本学会で印象的だったのは、福井県立大学恐竜学部の河部壮一郎教授の講演である。CT スキャンを用いて、恐竜の頭蓋骨をスキャンし、3D 表示から脳の大きさやその形状を考察し、どのような性格を持っていたのかという内容である。結果、恐竜の脳は市販の目薬サイズであり、非常に小さい。また恐竜の分類や大学の特色に関する話など、放射線技術ではない内容に興味を持った。

6. 現地参加がわかる写真(4枚)

